

国語力を高める「読書」のあり方

提言

高木 まさき

甲斐 雄一郎

実践提案

青山 由紀

白井 淑子

中條 敏江

一 最近の動向から

言語環境・メディア環境が激変する中、国語科教育は大きな変革を求められている。「PISA」「文化審議会答申」「中教審議経過報告」「全国学力・学習状況調査」等種々の学力調査や提言等を通して変革の方向性が議論されている。

そんな中で注目されているのが「読むこと」の教育。所謂「PISA型読解力」が話題になったこともあり、「読解指導」に目が行きがちだが、実は「読解指導」を見直すためにも「読書指導」の改革は急務である。新「学習指導要領」でも「読書指導」は改革の柱だ。

そこで最近の動向から読書指導に関する論点を拾い出しておく。

一つは、学校図書館協議会・毎日新聞社による調査や「PISA2000」調査等により、日本の子どもたちの読書離れの深刻さが浮き彫りになり、従来のように「読解」指導さえしていれば「読書」力も身につくとは言えないことがはっきりしたこと。

二つめは、文化審議会が答申「これからの時代に求められる国語力について」（二〇〇四年）において、情報化社会を背景に、「国語力」の中核である「考える力、感じる力、想像する力、表す力」等の育成のために

は「読書」が不可欠であるとしたこと。

三つめは、「PISA」が突きつけた課題。「PISA」と言えば「読解力」と考えがちだが、この「読解力」とは「reading literacy」の訳だ。通常「reading」という語は読解と読書を区別しない。だとすれば、「PISA」が突きつけた課題は「読書力」の課題とも言える。そこで問われていたのは、情報化社会における「読書生活」を見据えた「読書力」の質であったと言える。

以上を踏まえたとき、読書指導は、どのように見直されるべきか。大切なことは、現実の「読書生活」の姿、またあるべき姿を念頭に、読書行為と指導方法を丁寧に分析し、効果的な読書活動を組織することだろう。以下にその観点を列挙してみる。

二 読書行為の分析

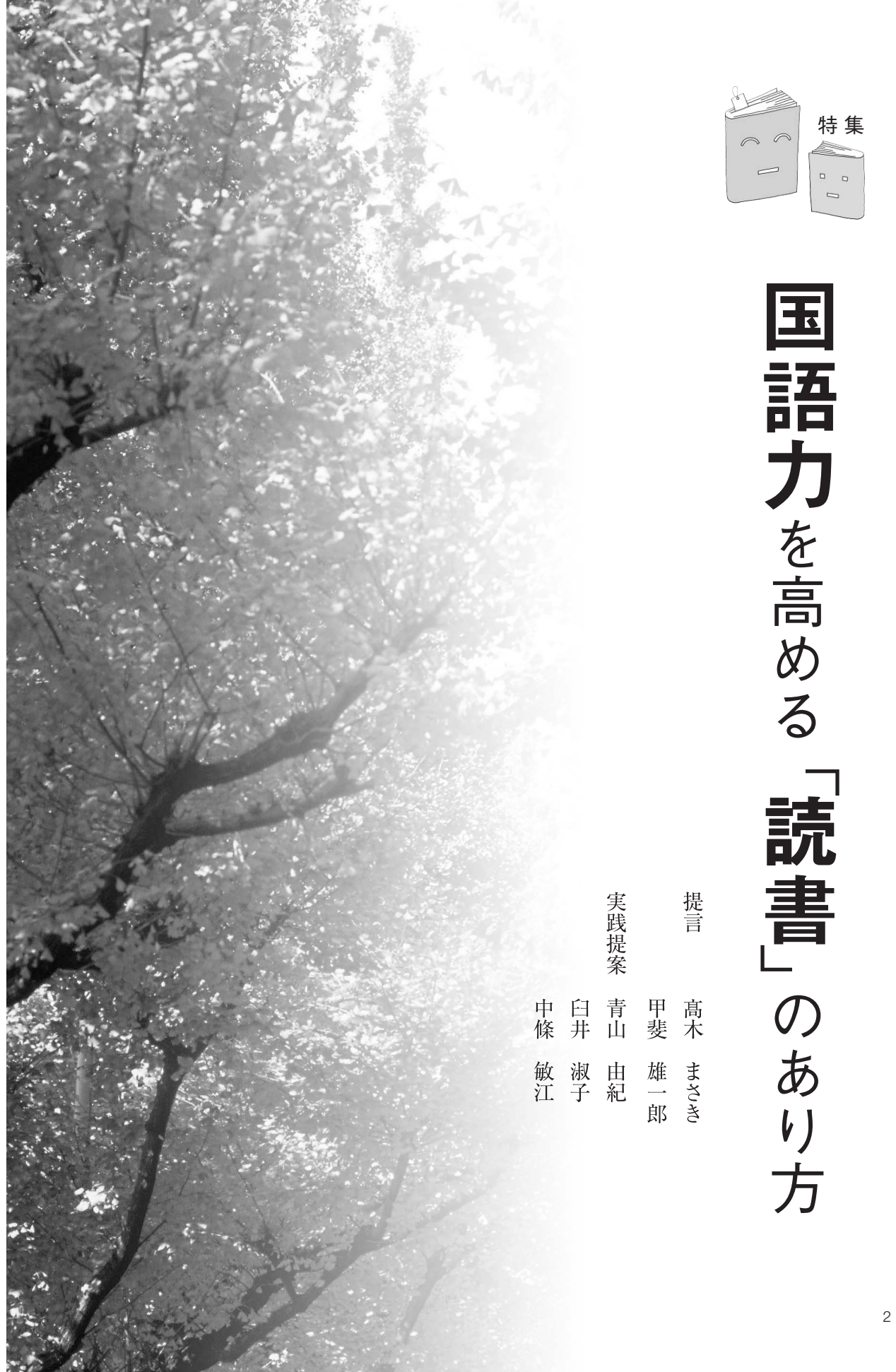
（１）読書の目的

読書の目的は、従来、娯楽読書と情報読書、生活読みと学習読み等と二分されることが多かった。だがこれでは粗すぎて目的に応じた読書指導は難しい。読書の目的は一つとは限らず、途中で変わることもありうる。それを前提として目的の分類を試みた。

①エネルギー読書（元気になったり、癒さ

「読書生活」をデザインする力を 育む読書指導

横浜国立大学教授 高木 まさき



れたり。あらゆる読み物が対象)

- ② ハウツー読書(何かのやり方・コツを知
る。入門書やレシビ等が好例)
- ③ インフォメーション読書(必要な情報を
集めて活用する。あらゆるものが対象)
- ④ レモンの切り口読書(切る角度により対象
や世界の見え方が変わる。随想や小説
等)

- ⑤ パラダイム読書(人生観・世界観の土台
を作る。哲学・思想や名作の類が好例)

* 右の①④は学生のネーミングを借りた。
ただしその学生は二分法の立場。

(2) 読書材の範囲・種類

読解と読書ではなく、より現実の「読書生活」に近い「reading」の立場に立てば、多くの読書材が視野に入ってくる。

- ① 本(絵本、物語・小説、伝記、詩歌集、科学的読み物、解説書、電子ブック等)
- ② 新聞、雑誌、広告(情報だけでなく、写真・図表、レイアウトの仕方等も)
- ③ 辞書、事典、白書、統計、年表、参考図書
- ④ 表紙、目次、索引、手引、注釈・解説
- ⑤ 掲示、板書、学級通信、規則、ガイドブック、パンフレット
- ⑥ ホームページ、Eメール、マンガ、写真・映像等

(3) 読書材に関する基礎知識

読書材の範囲や種類に応じて、それらに関する基礎知識の活用も欠かせない。

- ① 本の構成、本の種類(目次・索引・奥付、単行本・文庫本、事典、参考図書等)
- ② 新聞や雑誌の種類・構成・編集の仕方、関連ウェブサイトの探し方、読み方
- ③ 本・文献・情報の収集方法(図書館、インターネット、書店等の活用)

(4) 読書行為のプロセス

次のような読書行為のプロセスを想定し、それぞれにあった指導法を考える。

- ① 多様な活動の中から、読書を選択する(なぜ映画やインターネットではないのか)
- ② 読む前に、本や文献に関する情報を得る(図書館、書店、書評、インターネット等)
- ③ 読みながら考えたり、想像したり、批評したり、交流したりする
- ④ 読んだあとで、評価したり、人に伝えたり、読み広げたり、再読したりする

(5) 読み方の種類

これまでのように分析的な読みばかりでなく、現実の「読書生活」に生きる目的に応じた多様な読み方も学ばせたい。

- ⑤ 本の帯作り、ポップ作り、紙芝居作り、絵本作り
- ⑥ 説明書等に従った物作り、説明文の記述と事実を比べながら読む
- ⑦ 調べ学習から発表・レポート・意見文作成へ
- ⑧ 読書から創作へ(物語作り・詩歌作り・詩歌集作り、事典作り等)
- ⑨ 教科書を二冊の本として読む(大村はま氏の実践等)

四 「読書生活」をデザインする力へ

冒頭で「読書指導」に関する最近の動向を取り上げた。しかし肝心なことは、それら動向の底に潜む危機を見据えることだ。最後にその点を確認し、稿を閉じたい。

私たちは、溢れかえる情報の中で偶然手にした「情報の断片」(文化審答申)に動かされがちだ。しかし情報は常により大きな知識構造の中に組み込まれており、そこから切り離された「断片」は過ちの原因ともなる。あるいは経済のグローバル化が進む中、人々はうまく立ち回って自分だけ得をする「情報の断片」を求めたがる。だがそれは現実追随型の思考は生んでも、あるべき社会を構想するような価値創造型の思考は生み出さない。そこで種々の本や情報を、様々な読み方を

- ① 黙読・音読・朗読・群読
- ② 熟読・速読・拾い読み・斜め読み、再読、多読・乱読
- ③ 比べ読み・重ね読み・広げ読み
- ④ 題名・表紙・筆者のプロフィールを読む、目次・索引を読む、前書き・後書きを読む

三 指導方法の分析

(1) 読書指導の段階性・位置づけ

読書指導は、部分的・単発的な取り組みでは成果があらがない。単元内、年間、学年を超えた発達上の段階性・位置づけなどを明確にした指導が望まれる。

- ① 読書行為のプロセスに応じて
 - ・ 読む前に何を指導・支援するか
 - ・ 読んでいる最中に何を指導・支援するか
 - ・ 読み終わった後に何を指導・支援するか
- ② 年間カリキュラム、教科間での位置づけ
- ③ 発達上の段階性(読書興味の発達、読書技能の発達)

(2) 読書を広げるための視点

読み広げたり、読み比べたりするには、単に同じ作者・同じシリーズだから、というのではなく、より具体的で、より多様な視点を設けることが効果的である。

通して、比較し、批判し、関係づける力、あるいは一冊の本を読み通してねばり強く思考する力が重要になる。そのために、これからの読書指導は、旧来の読解・読書、あるいは娯楽読書・情報読書等の二分法から脱し、情報化社会の現実即した「読書生活」をデザインする力を子どもたちに身につけさせるものでなければならぬ。

先に例示した読書行為や指導方法の分析は、そうした読書指導を実現するために欠くことのできない作業だと考えている。